

# 設立から 22 年が経った福祉施設研究所。 時代が変化していく中で考えることは？



福祉施設研究所 所長  
裏木 隆 うらぎ・たかし

2005年に設立した福祉施設研究所。福祉施設研究所の所長を務める裏木さん。眩しいほどの笑顔で場を和ませてくれる裏木さんに福祉施設の専門家としての意見から、仕事への想いをインタビューしました！

福祉施設研究所 HP



福祉施設研究所 ブログ



福祉施設研究所 Facebook



## 高齢者施設の最近の傾向

「長引くコロナ禍で、高齢者施設設計の考え方に変化はありましたか？」

福祉施設において感染症の対策は、実はコロナ禍以前からの課題でした。しかし、感染力も高く直接死に繋がるリスクのある新型コロナウイルス（以下、略称：コロナ）の影響で、福祉施設のあり方にも変化が見られます。例えば家族と面会することもオンラインという形で行われるようになりました。でも、それで利用者さんは本当に満足されているのでしょうか？直接会って家族の元気な姿を見たい、直接会って孫の小さな変化に気づき成長を見守りたい方もいるのではないのでしょうか。直接会うことで相手の細かい表情まで見え、より多くの情報や感情が伝わります。やはり「会う」ということは利用者にとって、「ご家族にとっても励みになるので、直接面会するという仕組みを欠かすことはできない」と考えています。

「具体的にどんな提案をされたのでしょうか？」

例えば、建物の入口の前にある風除室を利用して、建物の中に入らなくてもエントランスホールで利用者ご家族がガラス越しに面会できるような仕組みを提案したこともあります。

また、通風・換気は機械でも行えますがそれだけではダメです。生活する空間は、24時間365日いる場所です。自然を取り込むことで光・風が人間に与える癒しの力は非常に大きいとコロナを通して、自然を取り込むことの大切さを改めて実感しました。

「コロナ以外にも変化はありますか？」

近年は、施設側も利用者側も求めるものが高くなってきているように感じます。例えば、ある高齢者施設では、パン工房やカフェ、地域をからめたイベントを行いたいという声もあります。こういった施設側からのソフト面での要望は十年前にはなかったですね。「高齢者の最低限の生活を保障する」という以前の感覚から、「毎日楽しく有意義に過ごせる環境を提供する」という感覚に変わってきていると感じます。

「利用者の反応はどうですか？」

昨年竣工した介護老人福祉施設を訪れたとき、施設のことを嬉しそうに教えてくれる利用者さんに出会いました。眺望を活かし広々とした海が見えるよう設計したお風呂の窓を、私が設計者だとは気づかずに、「このお風呂すごくいいから見て行きなよ」と施設について誇らしげに話す利用者さんの笑顔を見て、感動しました。利用者さんの自慢の施設になったことが嬉しかったし、これが私たちの目指すべきゴールだと再確認できました。

## 時代が変化しても 変わらない 「福祉研の想い」

「改めて、福祉施設研究所の目指す建物とはどのようなものでしょうか？」

私達は「人間の生活において最も重要な生活環境を変えたい」という想いで20年以上の間、新しい福祉施設の在り方を追求してきました。

そう考えるようになった背景には、とある特別養護老人ホームの施設を訪れた際の経験があります。当時の高齢者施設は、薄暗くて病院のような雰囲気、建物が多くまさに「施設」といった感じの場所でした。

高齢者施設は高度成長期の日本を支えてきた方々がお仕事を引退し、ようやくゆっくりと過ごす、その人にとってはまさに人生の終盤を過ごす場所です。本当は家族と過ごす事が一番良い事ですが、やはり様々な事情がありずっと付き添ってはいけません。施設での生活をする事になるわけですから、自分自身がそういう状況になったらどんな場所に住みたいでしょうか？どんな空間でくつろいでいたいでしょうか？

明るくて自然を感じる事ができる場所で、食事が出来、友人と楽しく会話する。自分の落ち着ける場所があって少し静かに過ごす事もできる。安心してサービスを受ける事ができ、快適な生活が続けられる。



特別養護老人ホーム湯楽苑  
Nagasaki, Japan



M village project  
Aichi, Japan

人それぞれの感じ方はありますが、何か一つでも生活を豊かにする仕組みや空間がある事で、とても楽しく快適な生活をする事が出来ると思っております。

私達は、そういった提案をしたいと考えています。生活する空間は、24時間365日いる場所です。これまで最前線で活躍してきた方々の人生の最後だからこそ、楽しみを味わって毎日を送って欲しいし、その環境を作る私たちの責任はとて大きいと感じています。

何か一つでもいいのです。大切な時間を過ごす場所を、拘りを持って創り続けていきたいと思っています。

そして時代とともに求められる事も違ってきます。例えば、新築や建替だけではなく、環境負荷をできるだけ抑えたりノベーションをすることもあります。その土地・既存建物の魅力を見極め、そこに新たな価値を付加することで、事業的にも環境的にもサステイナブルな提案をしていきたいと考えています。



SANCHI project / Tokyo, Japan  
木造住宅を改修してグループホームにリノベーションするプロジェクト

## 福祉施設研究所 スタッフ紹介 // OUR STAFF

日比野設計 福祉施設研究所 設計スタッフ  
石山 裕貴 いしやま・ゆうき

生まれた時から耳に障害があるというバックグラウンドを持ちながらも日比野設計に入社。同じ境遇の人達の想いがあるこそ、その人達のためにも社会貢献をしたく設計活動に励み5年目になる。趣味のデフサッカーでは、全国大会2連覇をしている神奈川県チームに所属。仕事もプライベートも全力石山さんにインタビューしました！



「仕事以外ではどんな活動をしていますか？」

週末は「デフサッカー」をしています。「デフサッカーは「音のないサッカー」とも呼ばれていて、耳に障がいを持った人達でプレーするサッカーです。現在は神奈川県チームでセンターバックのポジションを務めています。

「デフサッカーの面白さはどんなところにありますか？」

手話をはじめとするジェスチャーやアイコンタクトを用い、お互いの声が聞こえない中でコミュニケーションを取り、一丸となつて一つのゴールを目指すことです。日頃からチームメイトとのコミュニケーションを欠かさないようにはしています。

「コミュニケーションという点で、仕事ではどういう工夫をしていますか？」

「日比野設計に入ろうと思ったきっかけは何ですか？」

そもそも設計者を目指そうと思ったのは、隣人の影響が大きいんです。彼は建築家で、幼い頃から彼の家が好きで、気になっていました。それをきっかけに小さいころから潜在的に建築が好きで、建築士になりたいと中学生から思っていました。

「今ほどのような仕事をしていますか？」

「プロジェクトの完成が楽しみですね！今後の石山さんに期待しています！」

「今ほどのような仕事をしていますか？」

「今まではサポートをする側でしたが、今回新しい仕事を任せてもらえて嬉しく思っています。まずはその期待に応えたい気持ちです。今の物件を完成させ、一から自分で考えた建物が完成する喜びを味わってみたいですね。そしてずっと支えてくれている家族に報告し感謝を伝えたいです。」